

# 國學院大學學術情報リポジトリ

Cultural background of emergence of festivals with "Yama" or "Dashi" or mountain-image vehicles focusing on divine processions with mountain-like representation

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 聡子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00002021">https://doi.org/10.57529/00002021</a>

# ヤマ（山車）祭り成立の背景

## ―神の移動と「山」―

鈴木聡子

### 要旨

本稿では、神が移動する際に登場するヤマについて、祇園会を起点とし、中世に行われていた春日若宮御祭、住吉社の卯日御祭を取り上げ、それぞれの祭礼において神霊の移動にもなつて見られる形を分析することで、ヤマ（山車）祭り成立の背景を改めて考察していくことを目的としている。

春日若宮御祭と住吉社の卯日御祭には、御旅所などへ社殿から神が移動する際、祭礼を担っている人々が神などの神聖な場の樹木を各々に手に持ち、神霊と共に移動していくという様子が共通性があった。この様子が若宮御祭においては「山のごとし」ととらえられているように、神霊とともに山（神域）が動くイメージであった事を見出した。

この神聖な樹木がかたどった山が、神霊と共に動いた事と祇園会の神幸との間には、神霊の出現に際して「山」のイメージまたは「作山」が伴うという形をとるといって共通する。

春日若宮御祭が時代的に先行することからすれば、「山」（神域）の象徴が神霊を迎えて共に動くという祭り形態を背景に、祇園会の「作山」が成立した可能性を導き出した。

### キーワード

祇園会、ヤマ、標山、春日若宮御祭、住吉社卯日御祭

### はじめに

現在の神社祭礼には、車輪を付けて曳かれたり、担がれたり、一ヶ所に据え置かれる、「山車」、「担ぎ山」、「据山」、「置山」、「曳き山」などの名で呼ばれる物が、多く登場している（『付録編図・表』参照）。それらは、その名称から、山に見立てられているものと理解されており、形態分類的にヤマと総称されている。

だが、現代の神社祭礼では、ヤマは全国的に分布し、各地の歴史や風土などと融合して、多様化しており、ヤマの原初的な形を見出すことは非常に困難といえるだろう。ところが、それらは多くの場合、神が神輿などに遷されて御旅所などに移動する時、また、御旅所から社殿に還る（還御）時という、

神が移動する際、氏子町内によって出されるという祭礼構成上の位置付けが共通する。

そもそも神社祭礼において最も早くヤマが登場する中世の祇園祭では、神輿が社殿から御旅所に移動する際、鉾・山を民衆が曳いて巡行していたことが史料などからうかがえる。

本稿では、このヤマが神の移動に伴って登場するという点に着目し、祇園祭における「作山」の成立状況を確認するとともに、同時代に行われていた春日若宮御祭、住吉社の卯日御祭を取り上げ、それぞれの祭礼において神霊の移動にもなつて見られる形を分析することで、ヤマ成立の背景を改めて考察していきたい。これにより、従来、ヤマというモノそのもののみ視点に向けてなされてきた神の依代や風流の囃し物などの解釈を相対化し、ヤマ

の成立を祭礼の文脈の中で捉えるべきことを問題提起したい。

## 第1章 祇園祭のヤマの成立とその性格の問題

### 1. 神社祭礼におけるヤマの初見

神社祭礼にヤマが登場する形は、近世以降、華美な祭礼として全国的に展開していた。このヤマの始まりについては、早い段階から祭礼の中に登場していた祇園祭におけるヤマが起源として捉えられている。<sup>①</sup>

中世の神社祭礼にヤマが出てくる初見史料には、『師守記』貞治三年（一二三四）六月七日条で、「作山」と記されたヤマが祇園会に登場していたことがわかる。他には、『東寺執行日記』嘉吉元年（一四四一）四月十三日条に「稲荷祭、ホク三十六本、作山十、ホク毎二作山ヲシテ渡之、」と記された、稲荷祭の「作山」の例が代表的な例で、大多数のヤマは中世の後期から主に近世以降に登場し展開している。

次に、ヤマの始まりともされる祇園祭の「作山」に焦点をあてて見ていきたい。

### 2. 祇園祭におけるヤマ（「作山」） 史料的登場以前と以後

現代においては祇園祭と称される祭礼は、中世においては祇園御霊会・祇園会などとよばれた。六月七日に神輿洗・神輿迎があり御旅所へ遷御し、七日間駐輦したのち六月十四日に御旅所から社殿へ還御する。

この祭礼の起源については、牛頭天王の祟りにより疫病が流行したため、貞観十一年（八六九）に天下悪疫流行の鎮祭として、神泉苑に六月七日に六十六本の鉾を立てて、六月十四日に洛中男児が神輿を神泉苑に運びこんだのが始まりと伝えられている。<sup>②</sup>

この他にも、『二十二社註式』によれば、天祿元年（九七〇）六月十四日を始まりとするほか、『社家条々記録』に天延二年（九七四）大政所と称す

る御旅所が高辻東院に設けられ、神輿が渡御する祭礼が初めて行われたと伝えられ、おおよそ祭礼創始には年代の誤差はあるものの、十世紀後半には祇園会の基本的な祭礼形式が形づけられていったことがうかがえる。

この祇園会が形成された時期に描かれた『年中行事絵巻』には、六月十四日の還御列が描かれており、四騎の乗尻を先頭に御幣・太鼓・櫛をもつ人々や扇鉾二本・騎乗の巫女二人・王の舞・獅子舞二組・幸鉾四本と続き、神輿三基などがみえ、当時の様子がうかがえる。この他に長和二年（二〇一三）には神輿の後に散楽の空車がでていた様子なども『本朝世紀』長和二年六月十四日条にみられる。

この時期の祇園会は、人々が行列の見物をしている様子もみえ、その見物人の興味を最もひいていたのは、馬長であった。馬長は主に蔵人頭より小舎人童などから選ばれ、華麗な衣装を着して馬に乗り祭礼に参列するものであったが、保元二年（一一五七）に洛中の豪家をこの馬長の任にあたらせるようになってからは、公の色彩は弱められ、民衆の祭礼としての色彩が強くなっていった。

鎌倉期になっても馬長は注目の対象とされていたが、南北朝期になると、鉾や「作山」が注目の対象として史料上に登場する。『師守記』貞治三年（一二三四）六月七日条によれば「今日祇園御輿迎如例。鉾以下冷然久世舞車有之云々。作山風流等無之。定鉾許也。」として、祇園会に「作山」がみえてくる。

この他にも十五世紀に記された一条兼良の『尺素往来』に「祇園御霊会今年殊結構。山崎之定鉾。大舎人之鵲鉾。処々跳鉾。家々笠車。風流之造山。八撓。曲舞。在地之所役。定叶於神慮歟。晩頃白河鉾可入洛之由風聞候」とある。ここには、様々な鉾や芸能とともに「風流之造山」があり、祇園祭における「作（造）山」の登場も恒例化していたことがうかがえる。

しかし、あくまでも「作山」や鉾の断片的な記録であり、その実態が明らかに見られるようになるのは、応仁の乱以降の史料である。応仁の乱前後の

ヤマの実態を次項で見たい。

### 3. 応仁の乱前後における祇園会の神輿巡行とヤマの形態

応仁の乱により、京中は被災し、この影響により祇園会も中断されていたが、明応年間に祇園会の再興の動きが始め、明応九年（一五〇〇）によりやく再興された。この時の様子が史料などからみえ、当時の神輿の神幸路や（参考地図1）、応仁の乱前と再興された時の祇園会に出ていたヤマと鉦が何処の町によってだされたかの詳細を『祇園社記』十五にみる事ができる。（表1参照）この史料によれば、応仁の乱前には鉦とヤマは五十基ほど登場し、大部分がヤマで占められていることがうかがえる。

鉦の起源は、社伝にも見られるように、御霊会に用いた祭祀道具の鉦に因むものであることと推測できるが、ヤマとは一体どのような性質を持っているのだろうか。

### 4. 祇園会のヤマの起源と性格についての疑問点

祇園会に登場するヤマの起源については、大嘗会の際に曳かれた標山とする説が通説になっている。<sup>①</sup>標山とは、天皇の即位儀礼である大嘗会において悠紀主基両国より供納されるもので、また、一条兼良の『御代始和抄』によると、祭儀の際、両国の国司が列立すべき所を標す山として機能していたとされる。この標山の形態を詳細に記している『続日本後紀』天長十年（八三三）十一月十六日条によれば、

悠紀主基共立標。其標。悠紀則慶山之上栽梧桐。兩鳳集其上。從其樹中起五色雲。雲上懸悠紀近江四字。其上有日像。日上有半月像。其山前有天老及麟像。其後有連理吳竹。主基則慶山之上栽恒春樹。樹上泛五色脚雲。雲上有霞。霞中掛主基備中四字。且其山上有西王母献益地。及儉王母仙桃童子。鸞鳳麒麟等像。其下鶴立矣。

とあり、悠紀国の標山は、桐の木を植えた慶山があり、その樹上に二羽の鳳凰が乗り、木の中程には五色の雲が掛けられていた。また、その雲の上には太陽と半月の像があり、この山の前に老人や麒麟の像があることがみえる。また、主基国の標山は、慶山の前には中国の神仙や麒麟の作り物などが見える。これらの標山の形態が、近世期に描かれた絵図などの多くの資料に見られる祇園会のヤマと酷似する点が引き合いに出されて、関連性が求められている。さらに、この標山と祇園会を直接結びつける根拠として、『本朝世紀』長保元年（九九九）六月十四日条が例に挙げられて、関連づけられることが多い。

但今日祇園天神会也。而自去年。京中有雜芸者。是則法師形也。世号謂無骨。実名者（略）。等者。件法師等為令京中之人見物。造材擬渡彼社頭。而如云々者。件材作法。宛如引大嘗会之標。仍左大臣今聞食此由。驚被下停止之宣旨。隨召仰檢非違使。奉此由。檢非違使馳向彼無骨所。擬追捕之間。件無骨法師等在前問云々。逝去已了。爰檢非違使空以還向。且令申彼社頭無骨材停止之由。于時天神大忿怒。自禮盤祝師僧。蹶落。即付邊下人作託宣云々。

此間。今夜亥剋許。從修理職内造木屋発火災。内裏悉以焼亡。午後天皇乘腰輿。指左兵衛陣御出。經左衛門陣頭着職御曹司。幸間。左大臣乍騎馬自陽明門馳入（略）

史料の内容によれば、京中には法師形をした無骨という名の雑芸者がおり、この無骨が京中の人々に見物せんがために柱を作りそれを祇園社に渡そうとしたとする。しかしながら、その作法は、大嘗会の際の標山を曳く作法に類似していたため、当時の左大臣藤原道長は、この無骨の行為を停止するため、直ぐに檢非違使を遣わしたが、すでに無骨は逃亡しており、逮捕するこ

とが出来なかった。この柱の停止を知った天神は大いに怒り、そのため礼盤より祝師僧が顛落する事があり、近くにいた下人に託宣があったという。

この『本朝世紀』の記事は、無骨が標山に似た柱を祇園社に渡そうとした事件と理解され、祇園会に登場するヤマが、大嘗会の標山の形態に酷似していることと結び付けられて、その起源を標山に求める根拠とされている。<sup>5)</sup>

しかしながら、ヤマに関する起源については、どれも確実な証拠とはならない。そもそもこの史料は、無骨の曳こうとしたモノの形態ではなく、曳く「作法」が問題だったことを伝えているもので、ここから標山とヤマとの形態上の系譜関係を読み取ることはできない。また、無骨の起こした事件は長保元年（九九九）という十世紀の頃であり、祇園会のヤマの初見は貞治三年（一二六四）という、実に三百年以上もの間があることも問題点として考えられる。

だが、折口信夫は、大嘗祭の標山とヤマの形態が類似することから、ヤマの起源が標山にあるとし、また、標山が神の依り代としての性質をもつため、ヤマも同様に依り代の性質をもつととらえた。<sup>6)</sup> 後世の研究者の多くは、このヤマが依り代的性質をもつという説を踏襲してきたのだが、通説的なヤマの起源説自体が、不確定な論証の上で成り立ったものであるため、ヤマの性質に関しても慎重に取り扱わなくてはならないと思われるのだ。<sup>8)</sup>

一方、折口説に対して、ヤマを風流の一つとする見方がある。<sup>9)</sup> だが、この見方にも疑問がある。確かに、十五世紀の『尺素往来』は「風流之造山」と記し、当時の「造山」が風流の一つであったことは間違いない。ところが、祇園会の「作山」の初見史料『師守記』を見ると、「作山風流等」と記されており、「作山」と「風流」を別個のものとする認識が示されている。ここから、「作山」は本来風流とは異なる独自の意味を担っていたものと見られ、それが次第に風流化したのだと理解することができる。

ところで、これらの説をみると、ともにヤマをそれが登場する祭りの文脈から切り離し、ヤマというモノに関心を注いでいることに気付く。ヤマは、

それ単独で存在するのではなく、祭りの過程の中に位置を占めて登場するというごく単純な事実を、これらの説は無視したところで成り立っているのである。ヤマの成立を考えようとする時、これは無視できない問題であるといえる。祭りの中に成立したものであれば、祭りの文脈にこそヤマ成立の背景を見出すべきなのである。

6月14日	応仁の乱前		明応九年	
1	長刀ほく	四条東洞院	ナキナタホコ	四条東洞院トカラス丸トノ間
2	かんこくほく	四条室町と町間	天神山	五条坊門トアヤノ小路間也
3	かつら男ほく	四条室町と町間	いほしり山	錦小路西沓
4	かんたかうふきむ山	四条東洞院と高倉間	たい子のそま入山	五条坊門油小路ト高辻ノ間也
5	こきやこはやし物	四条油小路と西洞院間	内裏ノ花ヌス入山	五条東洞院トタカクラトノ間也
6	あしかり山	四条いのくま	花見中將山	四条烏丸トアヤノ小路間也
7	まうそ山	錦小路万理小路と高倉間	タルマ山	四条坊門油小路トニシキノ小路ノ間也
8	花ぬす人山	同東洞院と高倉間	かつら男山	四条町ト室町ノ間也
9	うかひ舟山	四条高倉と綾小路間	山伏山	四条油小路トニシキノ小路ノ間也
10	ひむろ山	綾小路万理小路と高辻間	伯樂天山	五条坊門トアヤノ小路ノ間也
11	あしかり山	錦小路東洞院	まうそ山	四条烏丸トニシキノ小路ノ間也
12	はねつるへ山	四条東洞院と綾小路間	神功皇后山	ニシキノ小路烏丸ト室町ノ間也
13	まうそ山	錦小路烏丸と四条間	かさはやし	四条油小路と西洞院ノ間也
14	花見の中將山	綾小路と四条間	はちか山	四条町トニシキノ小路ノ間也
15	山ふしほく	四条坊門むろ町	天神山	ニシキノ小路ト町ノ間也
16	留水ほく	錦小路と四条間	みち作山	四条西洞院ト町間也
17	庭とりほく	綾小路室町と四条間	琴ハリ山	アヤノ小路町西洞院ノ間也
18	ほうかほく	錦小路町と四条間	菊水山	ニシキノ小路ト室町ノ間也
19	しんくくわうくうの船	四条洞と綾小路間	布袋山	四条坊門ト町ト室町ノ間也
20	岩戸山	五条坊門町と高辻間	こきやこはやし	あやのこうちト室町間
21	おかひき山	五条と高辻間	ほうか山	ニシキノ小路ト西洞院ノ間也
22	かまきり山	四条西洞院と錦小路間	山伏ミネ入山	四条坊門室町トニシキノ小路トノ間也
23	たるまほく	錦小路油小路	あしかり山	アヤノ小路油小路ト西洞院ノ間也
24	太子ほく	五条坊門小路と高辻間	八幡山	四条油小路トアヤノ小路ノ間也
25			にわ鳥山	四条室町トアヤノ小路トノ間也
			先規相定終ニ渡也	
26			二十六番	四條トアヤノ小路ノ間也
6月14日	応仁の乱前		明応九年	
1	すて物ほく	二条町と押小路間	うしわか殿	四条坊門と烏丸との間也
2	たいしほく	押小路と三条坊門間	八わた山	三条と六かくの間也
3	弓矢ほく	姉小路と三条間	すすか山	三条からす丸
4	くけつのかい山	高辻いのくま	くわんおんふたらく	六角町と四条坊門之間也
5	甲ほく	所々のくら役	あしうさうしやうめう	六角からすまると室町之間
6	八幡山	三条町と六角間	大友の黒主	三条室町と六かくの間也
7	ふたらく山	錦小路町と四条坊門間	龍門瀧	六かく室町と四条坊門との間也
8	しんくくわうくう舟	四条と綾小路間	かつら山	四条坊門と油小路之間也
9	やうゆう山	三条烏丸と室町間	ゑんの行者	あねか小路室町と三条之間也
10	すすか山	同烏丸と姉小路間	たか山	三条町と室町との間也
11	鷹つかひ山	三条室町と西洞院間		
12	山	三条西洞院と油小路間		
13	こきやこはやし物	四条油小路と西洞院間		
14	あしかり山	四条いのくま		
15	まうそ山	錦小路万理小路と高倉間		
16	いたてん山	同東洞院と高倉間		
17	ふすま僧山	鷹つかさ猪熊兵衛と間		
18	なすの与一山	五条坊門猪熊と高辻間		
19	うし若弁慶山	四条坊門烏丸と室町間		
20	しやうめう坊山	同町と室町間		
21	泉の小二郎山	二条室町と押小路間		
22	ゑんの行者山	姉小路室町と三条間		
23	れうもうの滝山	三条町と六角間		
24	あさいなもん山	綾小路いのくま		
25	柳の六しやく山	四条高倉と綾		
26	西行山			
27	しねんこし山			
28	てんこ山			
29	柴かり山			
30	小原木山			
31	かさほく			

表1 応仁の乱前の山鉾と応仁の乱後の山鉾



## 第2章 二十二社の神社祭礼における神幸と山のイメージ

### 1. 春日若宮祭における御旅所への神幸と「山」

前章における問題意識から、平安時代以降、国家祭祀として神社の中心的存在として位置づけられていた祇園社を含む二十二社の諸社の祭礼に、その手掛かりを探してみると、「作山」こそ出ないものの、「山」のイメージを担う要素の登場する祭りが、祇園会の「作山」成立以前から行われていたことに気付く。春日若宮御祭である。

祇園会の御旅所が形成された平安時代、時の氏長者・藤原忠通によって保延元年（一一三五）に春日若宮社が創建された。また『中右記』保延二年（一一三六）九月十七日条によれば、「春日若宮始祭、自今以後長為式日之由、被仰下」とあり、社の創始の翌年には、九月十七日を長く式日とするように氏長者の仰せがあったとされる。

春日若宮祭創始の背景をあらわす確証的な史料は残されていないが、創始前の長承年間には雨が多く、全国的に洪水飢饉に見舞われ、悪疫が流行するなど異常事態にあった<sup>⑩</sup>。この事態に当時の撰関政治の中樞にいた藤原氏は救済のために水神的性格を有する若宮神に祈願するため創始されたと考えられている<sup>⑪</sup>。また、若宮祭創始については、時の氏長者である忠通や弟の頼長が中心となって企図したものとされ、核となる神事（神幸・御旅所祭祀など）は神社側の神職が行うものの、『大乗院日記目録』保延三年九月十七日条に「若宮礼始行之、事務并大衆儀定、今度大願立願也」とあるように、祭礼全体には興福寺の大衆が深く関与していた。

春日若宮祭は、創始の当初より、盛大な風流を伴う御旅所祭祀が行われ、主に春日社の神職と興福寺の大衆らが一体となって神事と風流・芸能を行っていることに特色がある。

同じく中世における祇園会では、祇園社から京中の町中にある御旅所に神輿が神幸し、社殿の神事は祇園社の神職が執り行う。御旅所には、祇園社の

社家とは別に組織された御旅所神主がおり、この神主が御旅所において神事を行い<sup>⑫</sup>、町衆が組織した鉾や「作山」を神輿の遷御・還御の際に京の町中に登場させ神迎えを行うなど町衆主体で祭礼が組織されていた。

春日若宮御祭には、鎌倉時代以降に祇園会などに登場する「作山」などのヤマは登場しない。また、祇園会と若宮御祭の祭礼の担い手の層を比較すると、その性質にはかなりの差異があり、祇園会にみられるような町衆の関与を若宮御祭からは直接うかがうことができない。しかしながら、平安時代後期に成立し、その後発展していった祭礼を比較分析することは、同時代に祭礼を担った人々の観念を知る上では大変意義のあることと考えられる。

春日若宮御祭を担った神職や興福寺の大衆達にとって、社殿から御旅所に神霊が遷る神幸とはどのような意味をもったのであろうか。当時の社家日記から、祭礼における神職と大衆の視点を考えていきたい。

若宮御祭の様子は、最も早い時期の祭礼次第である春日若宮社の社家日記『中臣祐明記』建久四年（一一九三）九月十七日条にみることができる。

一 九月十七日若宮御祭、奉下御神次第、御神二付御鏡事如例、  
十六日、夕御御殿東南方  
二神二四ノテ懸天奉置

十七日、寅時、仁例御遷宮、乱声如例、三度在後、刻限 損 所令

渡之間、南方神人并若宮神人・本所・散所 損 二行立、各御神奉持

天御先申、若宮神主祐明勸請祝申天御橋二登、御鏡ヲ御神二付天祐明

奉抱、神人等二行立、彌懸、遷宮旅所ノ新殿ニ令付、御橋下神殿守

末春暫奉預、祐明以散米御殿内二天祓ヲ令勤仕天後自殿罷出、祐明抱

新殿ニ奉祝居、

供奉社司

若宮神主祐明・正預遠忠・権神主成房・祐忠・能満・祐兼・祐綱・能

清等也、神主泰隆ハ依中氣不參、氏人泰基・泰次・祐隆・泰成・泰忠

等也、旅所ニシテ夜明間、常住・郷・八巫女遊間、辰時終、



### 渡物次第

楽人日使 巫女 傳供御供 一切(物) 細男 猿楽 競馬 流鏑馬

田楽 雖然競馬・流鏑馬依雨一騎許射、於渡物皆渡了、

次日、競馬九番 流鏑馬九番 同相撲九番令遂了、

日使九郎属行近幣ヲ拜而、祐明立向取幣之間、中ハ御供以後日使祝申事也ト申、然者行近何様ニモ可有御心ト申、然者御供以後祝、次二使幣祝申、大宮料幣ヲハ取別天御殿後ハ令付、殿下御幣并中宮御幣酉時終令立、御使下家司幣持、先請取祝申、次中宮御幣神人國重取持、次祐明祝申、

一傳供御供之間、橋上登、左祐明・右遠忠向間、權神主以下傳供役ニ不立、然間祐明以何事不立哉、神事違例之由依申、大衆并五師・所司以外被仰、權神主・祐忠・祐綱・能満・祐兼・能清可追之由依被仰令立役了、自余事如例、日使膝突布六尋、本尺、左右衆如例、

一依大雨時刻至于午時物共不渡、其間以中綱増別会五師・所司兩度被尋云、先例依雨御祭延引有例哉、又御神一夜旅所有令留給事哉被尋、祐明申云、御神一夜令座例不候、雖有大雨渡物一人ツ、渡天、後日被行例ト申也、因茲渡物次第被定了、自卯終至于戌時雨降、寅時遷宮ニハ雨不降、還御ハ指笠、其役神人貞國也、  
一同十八日、相撲、成長慶ニ又相撲十番取之、

この史料からは、九月十七日の御旅所にむかう神幸の次第や、渡物の次第、また翌九月十八日になり、競馬・流鏑馬・相撲などの行事の後、御旅所における神幸の様子がうかがえる。

この式次第の中で特に傍線の箇所注目したい。傍線部は若宮社から御旅所にむかう神幸の次第が記されている。まず、寅刻に三度の乱声があり、南方神人や若宮神人ら神職達が二列に立ち、各々が神を持ち進む。若宮社神主の祐明は祝詞を申して橋に登り、御神霊の御霊代である鏡を神に付ける所作

がうかがえる。その鏡を祐明が抱え奉り、神霊を取り囲むように神人らは二列に立ち御旅所まで移動する。その後、御旅所の新殿に神霊を遷すという、一連の神幸の様子がみえる。

この神幸の様子は、その後の社家日記や神社年中行事書などから、中世を通してほぼ同じ形式で行われていたことが確認でき、さらに近世期には、様々な絵図にも描かれるようになる(図1参照)。

寛保二年(一七四二)に奈良の町人絵師である藤村惇叙によって作成された『春日大宮若宮御祭礼図』によると、「太御神 御神幸御役 若宮神主。若宮常住の禰宜守護し、奉り。警蹕とミさき発す。諸人。一同に声を和す。

御側 南郷 北郷 若宮禰宜 神の枝に紙手。切かけ。手々に差上げ。守護し奉る。山のごとし」として見え、神幸の際、神霊を神の持った神人によって囲い込むように護られながら遷御する様子が「山のごとし」と見られていたことがうかがえる。

この祭礼図の資料的性格は、春日社神職や興福寺僧などとの密接な接触や、彼らからの史料借覧によって、主に十七世紀から十八世紀前半までの近世初期の寺社史料を用いながら制作されたものとされる。そのため、この資料の中の絵図や祭礼に関する記述は、作者の私見ではなく、近世初期の社家や僧侶の日記などの寺社史料を各々引用したものと指摘されている。

このことから、神幸の際の「山のごとし」という認識は、近世初期の社家の認識であったことが導きだせる。また、神社年中行事書や社家日記などから祭りの形が中世以来変化しないで受け継がれたことを見ることができ、「山」という認識も同様に中世以来のものである可能性を示唆できる。

また、神職達が持つ神に関して、春日祭などの祭の前に三笠山に神人が入り祭祀に用いる神を採っていたことが神社年中行事書からわかる。若宮御祭の際に用いる神については、具体的な記述を見ることはできないものの、当然、祭礼の為の神を三笠山から採ったと考えられる。

以上のことを考え合わせると、神の「山」は、依り代や風流としての性質

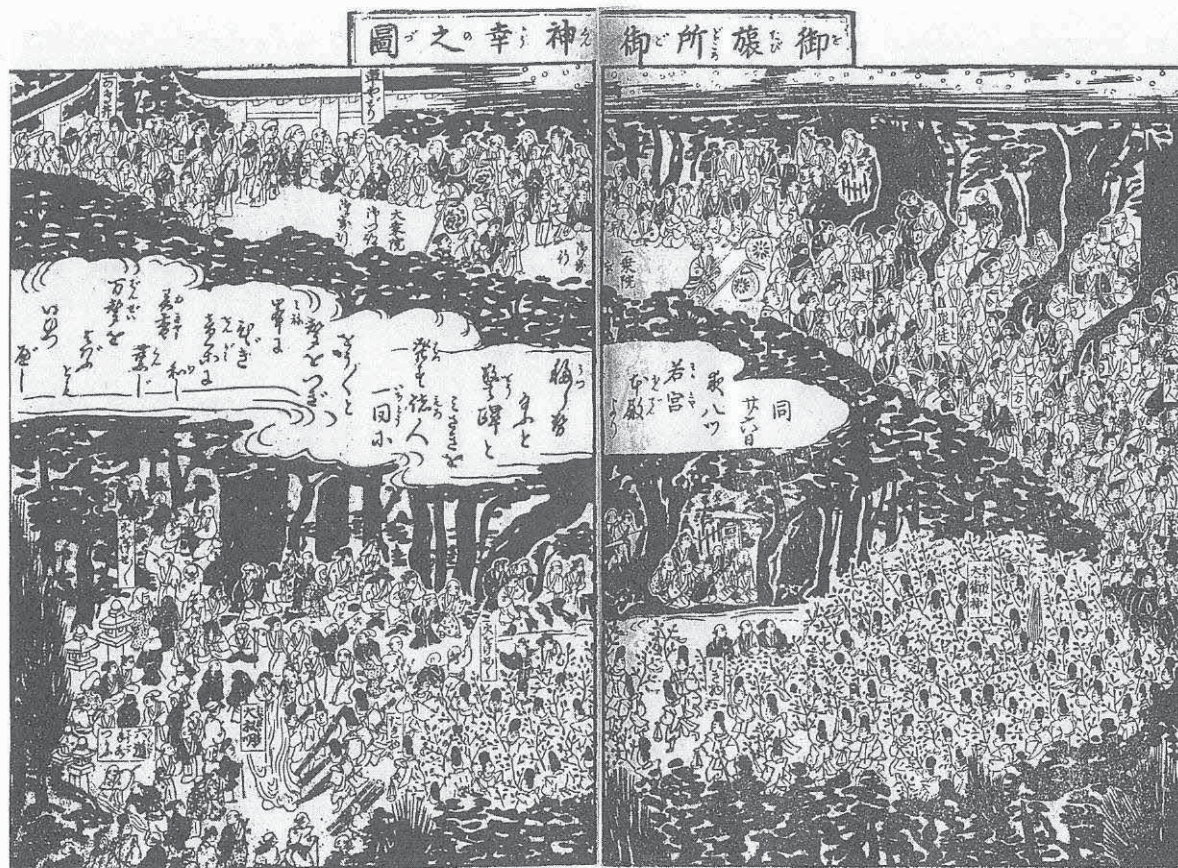


図1 『春日大宮若宮御祭礼図 全』より「御旅所御神之図」

はなく、神職達が持っている櫛は、鎮座地である三笠山の櫛と考えられることから、三笠山の象徴と見ることができ、若宮御祭の神幸は、神霊がその鎮座する「山」とともに動くという意味をもつ祭の形と理解することができる。

## 2. 住吉社の卯日御祭における神幸と「山」的要素

住吉社の卯日御祭とは、住吉社の祭神の鎮座した日が卯月上卯日であったことに因んだ祭礼である。また、ヤマは登場せず、御旅所祭祀や町衆などの関わりもなく、神職主体で祭礼を執り行っている。中世に行われていた住吉社の祭礼を、神職の視点を通して見ていくことで、神社祭礼の神幸とヤマの観念との関係がより具体的にみえてくると思われる。

中世における住吉社の祭礼を具体的にみる事が出来る史料として、南北朝時代に編纂されたとされる『住吉大神宮諸神事次第』があげられる。以下この史料より卯日御祭の次第をみていきたい。

### 四月。【卯日御祭】。

- ① 於住江殿。惣官権官以下着装束。惣官東。権官同。氏人布。午刻申案内。神人二人参也。惣官以下参也。於下客殿。東手水木綿進也。手水自書大海社司以下。氏人神官等参向。惣官権官木綿。侍氏人役也。氏人木綿面々雑色進也。

次惣官以下列立南門前。惣官権官南。氏人南北二行。神官一切経会殿上西。御供昇立之後。各参御前。神官前行。惣官座庭上。莛上圓座敷也。権官座莛。氏人繩莛。在庁氏人座北西。聊引下繩莛敷之着座。御幣国掌持也。神供備進之後。神官等退下。禰宜候御前之時。在庁取幣拜四度。神人請取幣。渡権少祝。請取授禰宜。祝言申也。此間神馬四匹引廻御殿。三。次神宝等奉取出也。権少祝閉。神殿御戸。向惣官前蹲踞之時退出。

- ② 参二御前。御供備進。三四御供同前。四所御供畢。

③ 社司以下氏人參五所御前。社司氏人等着座。御供備進。祝言權禰宜申也。此間。樂所參集北中門。五所御供畢。

④ 社司以下參御前之時。發乱声。社司候神殿北脇。神官候同南脇。氏人等候御前。奉寄神輿一基神馬。正禰宜申再拜。神人誓蹕行列如例。御列於北中門自西門至猪鼻東行。入一切經会中門。經舞台。自南門奉入御前。入南門之時。木綿取也。奉寄神輿神馬。申再拜。樂不止樂。神寶等奉納。次右着座。惣官權官幣殿疊引下廣庇敷也。着座氏人南中門廊。大海社司方同小艇。神官北小艇。在庁庭上。歌舞舞。次国以下東遊畢。退出。(略)

この年中行事書から卯日御祭の式次第の流れがうかがえるが、便宜上、式次第を4つに区分して以下に簡単にまとめる。

- ① 神職達が装束などの準備が整った後、一御前に参り、神供を備進し幣を取って四度拜を行う。禰宜が祝詞を奏している間、神馬四疋を三度引き廻す。次に神宝等を取り出して神殿の御戸を閉じ、神職は退出する。
- ② 二御前、三御前、四御前において御供を備進。
- ③ 社司以下氏人が五所御前に参り、御供備進し、權禰宜が祝言を奏上する。
- ④ 社司以下の神職は、五所御前から一御前に戻る。その後には神輿一基と神馬を寄せ奉り、正禰宜が再拜をして神幸する。北中門をでて境内を一周し、舞台を経て南門より入り、再び一御前に還御すると、樂を止め、神宝を納め奉る。その後、舞や東遊などが行われる。

この次第の中で、③、④に着目したい。住吉社の社伝によれば、神功皇后が住吉大神をまつろうと辺りを見回したところ、鷲が三羽来てとまったため、

この地に神の思し召しに叶うものとして奉祀したとされる。その鷲がとまった場が住吉社境内の五所御前とされている。<sup>(17)</sup>この社伝によって五所御前の場は、住吉社において住吉神鎮座に関わる神聖な場として認識されていたことが理解できる。

鎮座日に因む祭礼の中で、神職達が鎮座に深く関わりのある五所御前に参り神事をしてから神幸を行うという構成には注目すべきである。

近世の元禄期に編纂された『住吉松葉大記』卯日神事条には、この祭礼の式次第がさらに詳しく記されている。式次第の内容は基本的に『住吉大神宮諸神事次第』と同様であり、一御前の神事と二、三、四の御前で御供備進をした後、

(略) 今儀式四社御供畢両官以下參三所御前一御供諸式畢 各取一檜葉一枚一 入二四所御供樂一 參三集一神殿御前一當瑞垣西北二列立而後次第自北中門一練行其所レ持之(略)

とあるように、神職が五所御前に参り御供の諸式をおえて五所御前の御供櫃に入れてある檜葉一枚を各々の神職が一枚取り、一神前の御前に参集して、神幸が始まる様子がうかがえる。この様子は近世期の絵図『住吉名勝図会』にも描き出されている(図2参照)。

神の鎮座起源の地として最も神聖な場(五所御前)から、神職達が櫃(柏)の枝葉を手に持ち神幸を行うという事には、春日若宮御祭と同じように、神域の樹木に囲まれて神霊が移動する形を見ることができるともいえる。この史料は近世のものであり、春日若宮御祭のように枝葉で神霊を覆う姿とも違い、「山」のイメージで語られるようなこともない。しかしながら、近世前期において春日若宮御祭に似た要素が見られることは、それ以前から、「山」のイメージにつながり得る要素が神霊の移動の場面に登場していた可能性を示唆するといえよう。



図 2 『住吉名勝図会』「四月卯之日神事」 (『日本名所風俗図会』角川書店より転載)

## 結語

春日若宮御祭と住吉社の卯日御祭には、御旅所などへ社殿から神が移動する際、祭礼を担っている人々が神などの神聖な場の樹木を各々に手に持ち、神霊と共に移動していくという様子が共通性があった。この様子が若宮御祭においては「山のごとし」ととらえられているように、神霊とともに「山」(神域)が動くイメージであった事を第2章において見出した。

この神聖な樹木がかたどった山が、神霊と共に動いた事と祇園会の神幸との間には、神霊の出現に際して「山」のイメージまたは「作山」が伴うという形をとるという点で共通する。もちろん、両者の直接的な関係は見出されないが、春日若宮御祭が時代的に先行することからすれば、「山」(神域)の象徴が神霊を迎えて共に動くという祭り形態を背景に、祇園会の「作山」が成立した可能性を導き出せないだろうか。

本稿は、山車祭り成立の源流を二十二社という国家的祭祀に預かった古社の祭りの歴史的形態から探るといふ、従来にならぬ観点からの試論である。いまだ十分な検討がなされたとは言いが、今後、このような視点からの祭礼研究を深めていくための踏み台としての論考になれたら幸いである。

## 註

- (1) 平井直房担当、「山車」の項目『国史大事典(吉川弘文館、昭和六十三年)』
- (2) 『祇園社本縁録』
- (3) 当時の神輿の巡行路に関して『祇園会山鉾事』にみる事ができる。  
祇園御さい礼の御道つたへ之事  
大ま所の御とをりは、四条をにしへ、烏丸まで、それを南へ御たみ所まで、くわんかうの御時は、五条を西大宮まで、それを上へ三条まで、せうしやうゐんおなく四條を東のとゐんまで、其上へ冷泉まで御たみところあり、くわんかうの御とき、二条にしへ大宮まで、それを三条まで、
- (4) 「祇園祭の歴史」『祇園祭』(筑摩書房、昭和五十一年)『八坂神社』(学生社、一九九七)  
前掲註(4)同書。
- (5) 折口信夫「髻籠の話」『折口信夫全集』二所収
- (6) 折口信夫「盆祭り」と祭り屋台と『古代研究』民俗学篇1、(一九二九)
- (7) 平井直房担当「山車」の項目『国史大事典(吉川弘文館、昭和六十三年)』、平野孝国『大嘗祭の構造』(ベリカン社、昭和六十一年)、『平成七年企画展示図録 祭礼・山車・風流 近世都市祭礼の文化史』(四日市市博物館、平成七年)
- (8) 川出清彦『祭祀概論』(名著出版、昭和五十三年)  
上山春平氏も『本朝一世紀』の中の無骨の話から、祇園祭のヤマとの関わりについて、通説を踏襲しつつも、「何でこの話が祇園祭の山につながるのかわかりませんが、」と記している。
- (9) 『祇園祭の山と大嘗祭の標山』(上山春平著作集第五巻)、(法蔵館、一九九四)
- (10) 標山が祇園祭の造り山の起源となることには、脇田晴子氏も「いわゆる山鉾巡行と同一線上に結びつけられるものとも考えられない」としている。(『中世の祇園会―その成立と変質―』『芸能史研究』第四号(芸能史研究会、一九六四))。また、東野治之氏が、「大嘗会の造り物―標の山の起源と性格」『国立歴史民俗博物館研究報告 第一一四集』(国立歴史民俗博物館、平成十六年)のなかで、大嘗祭の標山が依り代として通説化されていることに疑問を指摘し論を展開している。
- (11) 植木行宣『山・鉾・屋台の祭り―風流の開花』(二〇〇一、白水社)
- (12) 創始前の長承年間には雨が多く、全国的に洪水飢饉に見舞われ、また悪疫が流行していた時期であり、長承三年は最もひどく、五月六月に長雨があり、京中で川があふれ(『中右記』長承三年五月十七日条)、十月には咳が流行した(『中右記』長承三年十月二十五日条)、『中右記』長承四年三月十七日条によれば、院より賑恤米数千石が放出され、同年七月には諸道博士に対し、天下の異常・疾疫・飢饉・盜賊等のことを勧進する(『勘文 敦光朝臣 変異疾疫飢饉盜賊等勘文』『本朝統文粹』長承四年七月二十七日条)という異常事態にあった。
- (13) 大和延和「おん祭の歴史」『春日若宮おん祭の神事芸能』(奈良市教育委員会、昭和五七年)
- (14) 『祇園社記』第二十三(『八坂神社記録』下)  
天延二年(九六四)に大政所御旅所として、助正という人物の居宅を寄進し、助正は、御旅所の神主に補任されて以来、神主職を子孫が継承していたことがみえる。
- (15) 『春日大宮若宮御祭御祭礼図 全』春日若宮祭の還幸の際にも神職が神を手に持ち神霊とともに移動する様が記されており、この場面でも「山のごとく」と記

されている。

(14) 幡鎌一弘「藤村惇叙著「春日大宮若宮御祭礼図」及び書誌とその周辺」『奈良歴史学研究』七〇号（奈良歴史研究会、二〇〇八）

幡鎌一弘「近世春日社における歴史のナラティブ―春日若宮祭礼創始の再検討―」『Regional』No.10（奈良県立同和問題関係史料センター、二〇〇八）

(15) 幡鎌論文註(14)

(16) 「春日年中行事書」二月辰日条によると、「神人入手三笠山、代採真榊而以充祭祀之用」とある。

「春日年中行事書」は延宝八年（一六八〇）の注進文とされている。この年中行事書は当時の行事を記したというよりも、中世の行事を研究史的に記したものとされる。『神道大系・神社編春日』「解題」（神道大系編纂会、昭和六〇年）

(17) 「卯之葉神事と舞楽」『住吉大社』(学生社、一九七七)